

〈報告〉

イギリス・フランス留学記

田 中 良 昭

一 序

中国禅宗史研究において、今世紀初頭中国の西辺敦煌から発掘された敦煌文献の占める重要な役割については、今更言を俟つまでもない。私はかねてからこの点に注目し、敦煌禅宗文献の調査研究のために、日本での敦煌文献センターともいべき東京駒込にある国立国会図書館支部東洋文庫において、敦煌資料室担当の諸先生の御厚意のもとに調査を続けて来た。しかし東洋文庫所蔵の敦煌文献は、いうまでもなく諸外国にある敦煌文献のマイクロフィルム撮影による写真集であり、「文献そのもの」ではない。従って、「写真による限り」という制約が常につきまとうわけ

で、文献研究をする上で、これを以って十分とすることはできない。むしろ機会あればそれを実物に当って調査してみたいというのが、私の永い間の念願であった。

ところが、はからずも昭和四六年度より、駒沢大学に教員の海外留学制度が新設され、その第一回の派遣員に選定していただくという光榮に浴し、積年の念願をここにかなえることが可能となった。この点、深い御理解と御支援をたまわった大学当局並びに学部諸先生各位に心から謝意を表したい。

かくして私は、当然のことながら留学先に敦煌文献のコレクションを蔵するイギリス、フランス、ソ聯の三ヶ国を選んだ。すなわちイギリスのロンドンにある大英博物館所

蔵のスタインコレクション、フランスのバリにある国民図書館所蔵のペリオコレクション、ソ聯のレニングラードにある国立科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部所蔵のオルデンブルグコレクションを調査の対象としたからである。もっとも敦煌文献のコレクションは、それ以外に中国の北京にある国立北京図書館所蔵の北京コレクション、わが国の京都にある竜谷大学、大谷大学両図書館所蔵の大谷コレクションがあり、更には台北やその他にも若干存在するのであるが、諸般の事情から結局前記三ヶ国を訪問することに決定した。そこで各コレクションについて、かつて既刊の文献目録を参照して作成した「敦煌禅宗資料項目別一覧」(『曹洞宗研究

員研究紀要』第一号（昭和四四年一月）を土台にしてその点数を概算し、先方の受入れ事情や滞在費等をも考慮して、ロンドンに四ヶ月、パリに二ヶ月、レニングラードに一週間、その他欧州諸国見学旅行に二週間という約七ヶ月弱のスケジュールをたてた。また訪問の時期も、気候風土や言語習慣の異なる外国での生活に慣れることを第一に考え、昭和四六年度末にあたる三月初旬に出发し、最初にイギリスに行き、七、八の二ヶ月をフランスで過ごし、九月初旬ソ聯を訪問した後、中旬に西欧諸国を北から南へと歴訪して、昭和四七年度前期の終了する九月下旬に帰国するという計画で準備を進めた。

羽田発ロンドン行の日航機は、途中モスクワのシエレメチエボ空港に約一時間立ち寄るので、最初の第一歩はソ聯ということになるが、それはいわば一步を印したというだけで、踏み出したことにはならない。快晴の東京から曇天のモスクワを経て、雨のロンドンヒースロー空港に到着したのは、三日の午後四時（現地時間）であった。東京とロンドンの時差は九時間であるから、実質一四時間の飛行である。「霧のロンドン」は有名であるが、私はその後の英国生活を通じて、これに「雨のロンドン」を加える必要があると思つた。この雨は、日本の雨のように一日中しとしと降るといふのではなく、晴れていたと思ふと急にサツと雨になり、また晴れるといふたいわば「通り雨」で、英国人はシャワーと呼んでいる。従つて外出する人は、レインコート兼用のオーバーを着て、傘はあまり持っていないが、このシャワーが多いお蔭で、到る処に緑の芝生が成育するのだと聞かされた。また英国は「丘はあつても山はない」といわれるように、なだらかな丘陵こそあれ、日本のような山らしい山はほとんどないし、

二 イギリスでの研究生生活

外国旅行にまったく経験のなかつた私が、初めて異国の地に一步を踏み出したのがイギリスである。もっとも、三月三日午前〇時

一步郊外へ出ると、緑の広々とした芝生や美

しい草木が生い茂り、私の滞在期間を通じて、庭木や街路樹が入れ替り立ち替り色とりどりの花を咲かせて、あたかもこの世の楽園の如き趣を呈し、大いに旅情をなぐさめられた。しかし気温の方は、全般的にかなり低く、明け方など冷気で目が醒めることも屢々で、六月初めになつても尚オーバーを脱ぐことができなかった。五月六月は英国のベストシーズンと聞いていたが、今年は異例の天候不順だつたようである。

ロンドンでの宿舎は、商社マンで現在西独デュッセルドルフ駐在の私の従兄に、同じ会社のロンドン駐在員伊藤康雄氏を紹介してもらい、伊藤氏のお世話で、最初の約半月をロンドン東南郊外セントのオーピントンという町にあるモーテルに、その後の約三ヶ月半は、ロンドン西北郊外ミドルセックスのケンントンハローという町にある個人下宿に定めた。方角こそまったく逆であるが、前者は汽車で約三〇分、後者は電車で約二〇分それぞれ市内のターミナルに着くことができ、市の中心部にある大英博物館までは、そこから地下鉄に乗り換えて全部で四、五〇分で通うことができたし、日本の通勤ラッシュから考えると、乗

物もかなりすいていて楽だった。もっとも大英博物館は午前一〇時の開館であり、私は午前中は宿舎で前日に調査した文献を、日本から持参した北京商務印書館編の『敦煌遺書総目索引』と、到着直後現地で購入したジャイルズ編の『大英博物館所蔵敦煌出土漢文文献記述目録』(Lionel Giles: "Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum")の該当部分と対照する仕事を日課としたために、宿舎を出るのは午前一一時すぎという場合が多かった。ロンドンに着き、大英博物館に入る前、附近の比較的安価なレストロカパブで昼食をし、午後一時頃から博物館入りし、午後の四時間近くを調査に費し、午後四時四五分頃の合図と共に借り出した文献を返却、外へ出て市の中心部であるピカデリーサーカスあたりで夕食を済ませて帰宅するというのが常であった。

大英博物館の一階は、中央に円型ドーム型の大閲覧室があり、左側が博物館、右側がキングスライブラリーという図書陳列室になっているが、私が敦煌文献の調査に通った場所は、正面ロビーから右へ曲って真直ぐに進み、つき当りの一番奥にある東洋印刷物写本

部読書室という約三〇人収容の小じんまりした閲覧室である。入口から入ると右側にカウンターがあり、周囲には東洋の各国語別に辞典・目録・索引等の基本図書が収納され、また大英博物館所蔵の文献目録の類も完備されていて、検索には至極便利であった。私の場合は敦煌出土スタイン文献の調査が目的であったからして、必要なスタイン番号をカードに記入して請求すれば、既整理の文献ならどこでも自由に借り出すことができた。そこで前述の「敦煌禅宗資料項目別一覧」をもとにし、更に二冊のカタログをチェックして、調査の必要と思われるものは時間の許す限りみることにし、結局既整理の禅宗文献約二三〇点を調査し終えた。

ところでこの大英博物館の閲覧手続であるが、ここでの閲覧の許可条件として、「大英博物館以外では閲覧不可能なものをみる場合に限る」という規則がある。私の場合、スタイン文献は大英博物館でしかみることができないものであり、その閲覧請求は別に難しいことではないが、より安全を期するために、在日英国大使館文化部(ブリテイッシュ・カウ

ンシル)で、前以って手続をすることにした。すなわち代表のデューク先生の御指示により、大英博物館々長宛に閲覧申込用紙の郵送を依頼し、郵送申込をしておいて、現地到着後館長事務室で、大閲覧室と東洋印刷物写本部読書室の両方の閲覧票を受け取ることができたが、これは好都合だったと思っている。

このブリテイッシュ・カウンスルの顧問高橋是孝先生と、代表デューク先生を御紹介下さったのが、私の滞英中に急逝された本学教授の石津照璽先生であり、また先生はロンドンでの生活及び研究上のアドバイザーとして、元BBC放送日本語担当官で、戦前からの親日家であり、柔道六段将棋二段の段位をはじめ、特に禅や日本文化に造詣が深く、禅に関する訳書や随筆等を出版されているレゲット先生を御紹介下さった。レゲット先生は、近年タトル社から『The First Zen Masters』を出版されたが、その中には高階瓊仙禅師の『舌頭禅味』の英訳もあり、先生が滞日中の昭和三六年頃だったと思うが、祖父を通じて高階禅師の御紹介をいただき、二度ばかり東京でお会いしたことがあり、因縁浅からぬ思いで、ロンドン到着後早速先生に連絡

をとり、研究生活上についての貴重なアドバイスをいただいた。特に図書館通いによる生活の単調化を防ぐために、先生は一流芸術家による音楽や舞踊の鑑賞をすすめて下さったが、実際にやってみて、それが最良の方法だったと今でも感謝している。また土曜日の午後や日曜日には、できるだけ市内や郊外の名所等を見学することに努め、セント・オーバンやカンタベリーの大寺院、ウインザー、ハンプトンコート、ノルパーク、ドーパーカッスル等の宮殿や古城、ホワイトポッジやクエーカー教発祥の地などの小じんまりとした教会等、各地の名所を見学することができたが、これはロンドン大学で仏教学を担当されている稲垣久雄先生や、ちょうど竜谷大学から来ておられた英文学の藤木白鳳先生、先生の甥の藤木隆義君、宿舍の幹旋をして下さった伊藤康雄氏等の御案内や御教示によるものである。

今一つ英国滞在中の尊い体験は、英国が世界に誘う学都ケンブリッジとオックスフォードを訪問できたことである。特に本学客員教授宮本正尊先生の御尽力によって、両大学の代表的な東洋学者にお会いすることのできた

ことは、望外の喜びであった。すなわち宮本先生から、ケンブリッジ大学クイーンズカレッジのヴェイレー先生とオックスフォード大学セントアンソニーカレッジのハドソン先生への紹介状をいただき、それぞれ昼食に招れて数時間歓談の後、構内を案内していただく等の光栄に浴した。両先生共既に第一線を引かれ、ヴェイレー先生の後にはブラフ先生、ハドソン先生の後にはストーリー先生が継がれていたが、引退したとはいえ両先生共かくしゃくたるもので、共に大英博物館でのスタイン文献研究の意義を強調され、大いに激励して下さいました。両先生の御親切もさることながら、落ち着いた静かな環境で研究のできる人々を大変うらやましく思った次第である。

さて最後に大英博物館での文献調査についてであるが、ここに収蔵されているスタイン文献は、既整理分すなわち前記ジャイルズの目録に採録された文献が約七〇〇〇点（一六九八〇）、未整理分が約四三〇〇点（六九八一—二九七）で合計約一一、三〇〇点の多きにのぼる。この未整理分の内、約八五〇点（六九八一—七八四九）は、既に補修

を終り、黄褐色の台紙に貼りつけられ、巻いてひもでしばって保存されているが、それに続く五〇点（七八五〇—七八九九）は、私の滞在当時補修のため持ち出され、それ以後の三四〇〇点は未補修で、これはしわのままにめられ、白紙で軽く包み、白いひもで結んであり、中には土中から出たままのようなたまり状のものもあった。私は最後の一週間をこれら未整理分の調査にあてたが、その便宜をはかって下さったのが、現在の中国部主任のネルソン先生と中国部担当の陸玉英さんである。この未整理分については、既に主任のグリーンステッド先生が分類に努力され、それをタイプにしたものがあり、日本から彼地を訪れた京都大学の藤枝晃先生、立正大学の兜木正亨先生、竜谷大学の井ノ口泰淳先生等がアイデンティファイされて記入してあるものもかなりあったが、これら未整理分の修理が完成し、その目録ができ上るまでには、まだまだかなりの長年月を要することは疑いない。私は僅か一週間という短期間だったので、グリーンステッド目録でコメントリー（註疏）、ブラックティス（実践）、プレイヤール（願文）、ガータ（偈文）と記入された八六

点を選び出して調査し、註疏中に『二入四行論』(七一五九)や『大乘無生方便門』(七九六一)等の断片を見出すことができたが、まだ目録に全然記入のないものも多く、今後各方面の専門家の力を俟たねばならないことを痛感させられた。なお東洋文庫へは、東京大学の山本達郎、榎一雄両先生の御尽力で、既整理分全部と、未整理分で補修の終わったもの内、六九八一―七五九九までの約六二〇点と、九一三七―九一六九、それに九一七二の約三〇点、合計約六五〇点の写真が既に収蔵されていることをつけ加えておこう。

三 フランスでの研究生活

四ヶ月にわたるロンドンでの文献調査を終えた私は、七月一日パリへ移動することになった。パリへは、既に四月下旬に五日ばかり七月からのパリでの研究準備のために訪問しており、その際宿舎としてパリ国際大学都市の日本館を予約し、更にペリオコレクションを収蔵する国民図書館の閲覧手続について、東京大学の池田温先生から御紹介いただいたパリ大学の朴炳善先生に会って、色々アドバースをいただいていた。それによれば、国

民図書館の閲覧手続には、旅券、写真二枚、駐仏日本大使館文化部発行の推薦状が必要だということであった。幸いパリには、昭和四六年三月本学仏教学部を卒業し、パリ大学にてフランス語の勉強をしている森覚純君のいることを、出発前本の奈良康明先生から紹介していただいてあり、四月の訪問の際も、空港での出迎えから市内の案内等、あらゆる面でお世話になった。こうして宿舎もきまり、閲覧手続も七月の到着直後に済ませれば、あとはロンドンと同じように文献調査を続けていけるものと思っていた。

ところがいよいよロンドン出発の数日前になって、パリの日本館から、夏休みには日本から日仏学院の学生がフランス語研修のために団体で来るからという理由で、予約取消しの通知が東京の留守宅へ行ったことが判った。困ったことになったと思ったが、とにかく行ってみた上で交渉しよう、予定通り七月一日の午後二時頃ロンドンを出発、一時間後にパリに到着し、出迎えてくれた森君と共に大学都市へ行って交渉してみることにした。最初カナダ館を交渉したが、満員とわかり、仕方なく日本館に一週間の約束で入れて

もらい、その間に他のパビリオンを探すことにした。三日目になってアメリカ館に空室のあることを知り、四日に二ヶ月の約束で申込んだところ、すぐに入館を許され、その日に日本館からアメリカ館へ移転した。日本館では朝食のサービスがないという不便さがあったが、アメリカ館には朝食用のカフェテリアがあり、全部個室で多少高価ではあったが、住み心地はよかった。日本館では日本語が話されるのと同様に、アメリカ館では普段は英語が使われているので、その点も大変有難かった。ただしそのためにフランス語がさっぱり上達しなかったことも事実である。また昼食は朴先生の特別のはからいで、図書館の職員食堂を利用させていただき、夕食は大学都市の中央にあるメゾン・アンテルナショナル(国際館)の大カフェテリアを利用することができたので、昼夜外食のロンドンに較べて、安価である上大変便利であった。ただ困ったことは、どのパビリオンにもお風呂の設備がなくシャワーだけで、特にアメリカ館のそれは、お湯がぬるくてあまり利用できなかったことである。換言すればそれ程にパリの夏は涼しく、背広も着通して過したが、研究

にはもってこいの気候であって、その点非常に有難かった。

国民図書館は、大英博物館同様市の中央に位置し、セーヌ河北岸のルーブル美術館から北へバレ・ロワイヤル(旧王宮)を隔てたクリーム色の建物である。地下鉄三号線のブルス駅からすぐの処で、大学都市(シテ・ユニベルシテール)からだど、郊外電車のソール線、地下鉄四号線、三号線と二回乗換で約五分を要する。正面から入ると中庭の右側に大閲覧室があるが、私を通ったのは、左側の二階の角にある東洋写本部である。この閲覧室も約三〇人位の座席があり、正面中央の一段高いデスクには、東洋写本部主任のセギイ先生をはじめ責任者が交代で座り、入口左側にカウンターがあって、そこで請求カードに記入して差し出せば、エレベーターで文献が運ばれてくる仕組になっていた。大英博物館の東洋印刷物写本部読書室では、東洋人の研究者は極めて少なく、私の滞在した四ヶ月間で一緒になったのは、ロンドン大学アウトレークチャラーとして日本文学を講じておられた梅花短期大学の松平進先生だけである。その他に親しかった人といえば、日本生れ

で、国際キリスト教大学にも留学されたオーストラリヤ国立大学日本史担当のサイザー先生位で、あとの大部分の人たちは、ほとんどユダヤ教の研究者であった。ところが国民図書館は、これと対照的に東洋人の研究者が多く、常にその約半数を占め、セピアの厚紙に巻いて、こげ茶のひもでしばってある敦煌文献をみている人も、多い時には四、五人を数える程であった。この一事をみても、フランスがヨーロッパにおける東洋学、特にシナ学の中心であることがうなづける。

この国民図書館では、閲覧手続等大変お世話になった朝鮮仏教専攻の朴炳善先生、同じくパリ第七大学で仏教学を担当しておられる李啓先先生に、研究、生活両面にわたる御指導をいただいた。両先生共、日本学の大家アグノエル先生のお宅に住んでいて、私も一度同じアメリカ館におられた韓国ソウルの明知大学行政学科長の朴璉鎬先生と一緒に、食事に招かれたことがある。この両先生は、道教学のカルタンマルク先生のお弟子さんで、カルタンマルク先生は、九月初旬日本の信州で開かれた国際道教学会に出席するため八月下旬旅立たれ、私はお会いする機会を失ってし

まった。また東洋学全域にわたる権威者で、前コレージュ・ド・フランス教授のドゥミエヴィル先生には、宮本正尊先生の御紹介をいただき、ラスパリュにある先生のお宅を訪問し、国民図書館でも二度ばかりお目にかかった。ご自慢のシシリ島からとり寄せたというブドウ酒を御馳走になりながら、約二時間半の間、専門分野について御指導いただいた。特に本学で出版を予定している禅宗辞典には、非常な関心を寄せられ、その出版を待ちこがれている様子であったし、『駒沢大学仏教学部研究紀要』の第一九号以降を是非購入したいからの御依頼を受けたので、帰国後お送りした次第である。先生のお弟子さんには、フランス国立科学研究所研究員で、中国語は勿論のこと、ギリシャ語、ラテン語、梵語、西藏語等各種古典語に天才的な才能を持っている呉其昱先生や、パリで日本文化や禅に関する翻訳出版をされている柴田増実先生がおられ、この両先生にも格別の御指導をいただいた。柴田先生には、花園大学の柳田聖山先生の御紹介でお宅にもうかがい、私の宿舎へも度々来て下さって有益なアドバイスをしていたいただいた。ドゥミエヴィル先生は、

ちようど『出家讚』の研究をされていたし、呉其昱先生は『臥輪禪師偈』のチベット訳を発見され、他の臥輪禪師の著作を総合して論文を作成しておられ、私の調査も先生のお役に立てることができた。またアメリカ人で呉其昱先生と同じ国立科学研究所研究員のハミルトン先生は、ソグド語の専門家で、『法華經』のトルコ語断片の研究に取り組んでおられた。その他現コレージュ・ド・フランス教授のスタン先生、パリ第七大学東洋学研究所長のジェルネ先生、ソルボンヌ(パリ第三、第四大学)のスワミエ先生等名だたる東洋学者が目白押しという盛況であったが、ちようどバカンス中でお会いする機会がなかったのは残念である。また私と同じ国民図書館に毎日通いつめていた日本の若い学究に、スタン先生の助手でチベット学の大谷大生今枝由郎君、フランス政府給費生で、大学都市ノールウェー館にいる言語民族学の上智大卒新谷忠彦君がおり、彼等の真摯な姿に接し、大いに啓発させられた。その外、敦煌文献の研究に來られた国語音韻学の東京教育大学馬淵和夫先生と唐代史の明治大学堀敏一先生、かつて本学にも関係された人文地理学の法政大

学小川徹先生等に僅かの期間ではあったがお会いすることもできた。

ペリオコレクションの全体にわたるカタログは、現在の処前述の『敦煌遺書総目索引』があるのみで、私もこれを利用したが、一九七〇年に漢文文献の最初の五〇〇点についての詳細な目録が、ジェルネ・呉其昱両先生の共編で国民図書館から出版された。すなわち『敦煌漢文文献目録』第一(『Catalogue des Manuscrits Chinois de Touen-houang I』)がそれで、二〇〇一—二五〇〇の五〇〇点についての詳細な解説があり、先に東京大学の池田温先生が、「ジェルネ・呉共編『ペリオ将来敦煌漢文文献目録』第一巻(P二〇〇一—二五〇〇)」、「東洋学報」第五四卷第四号)と題して、書評をかねた紹介をされたものである。この紹介にもある通り、ペリオ漢文文献は、欠番や一点に数多くの断片を含むもの等があつて、その数を決定しにくいのが、断片を別々に数えると、総計約三九〇〇点にのほるといわれ、今後目録の続編刊行が待たれるが、第一巻同様の内容にすると、これから何年先になるかわからないという。現在は左景権氏がその仕事に従事しておられるが、第二

巻以降は編集方針を変更し、簡単なものにする可能性もあるということを耳にした。いずれにしても大変な仕事であることには変わりなく、まったく頭の下る思いがした。

スタインコレクションの写真は、前述の通り一括日本へ將來されているのに対し、ペリオコレクションのそれは、種々の問題があつて一括というわけにいかず、私が数えた既將來の写真の合計は、現在の処約八〇〇点にすぎない。しかし禅関係の文献は、古く王重民撮影のものの中に比較的多く、近年前記の藤枝、井ノ口両先生や、竜谷大学の上山大峻先生、本学北海道教養部の近藤良一先生、更には国語学の青山学院大学石塚晴通先生等が撮影將來されたものや、同じく前記の柳田先生がパリ在住の柴田先生を通じて將來されたもの等で、ほとんどのものが網羅され、私はいわば落穂捨いの形で、今迄見落されていたものに經典の註疏類を加えて、約七〇〇点の撮影を依頼してきた。従つて、こと禅宗文献に關しては、他の分野に較べて極めて充実した写真を揃えることができたと確信している。こうしてパリでは、限られた日数で調査を終らせる必要上、一日の調査時間を延長し、

大体午前一〇時半頃から、途中約三〇分の昼食時間を挟んで、夕方四時四十分までみっちり仕事をせざるを得なかった。特にパリは内容的にいいものが多く、全部で約二〇〇点の調査を済ませたが、まだまだ調査を続けたい気持ちであった。従って夜はオーバーワークをさける意味で、一切研究のことには触れなかったし、日曜日にもっぱら休息にあてた。市内見物も四月に来た時に観光バスに乗ってほぼ済ませ、郊外の見物も、森君と一緒に、ヴェルサイユ宮殿とフォンテンブローへ行ったのと、鶴見女子大学にいる同窓の宮本延雄氏の御紹介で知り合ったユネスコ本部勤務の飯沢省三氏に、シャルトル大寺院の御案内をしていただいた程度にとどまった。ただパリでは、本学から四七年度の海外留学に出られた経済学部遠藤孝先生、仏教学部の横井覚道先生と会って食事を共にすることができたし、かつてヴェトナムから本学に留学し、大学院修了後ロンドン大学、パリ大学に学んだ黄氏碧さんに再会することができた。黄氏碧さんは、パリ大学大学院の論文に『学道用心集』の仏訳と註釈を完成し、近く出版のはこびということであった。

イギリス・フランス留学記（田中）

パリ滞在の八月中旬、十日間にわたって日本から来た団体に参加し、オランダ、西独、スイス、イタリーの四ヶ国を観光旅行したが、これは連日の文献調査の息抜きをする上でも、また未知の国の新しい風物に接して見聞を広める上でも、大変いい経験だったと思っている。当初は一人でソ聯からの帰途これら諸国を訪問する予定であったが、ソ聯行が先方の都合、更にはメンシコフ目録を調査した結果、一週間の滞在では不十分なることを知ったために、中止のやむなきに至り、その分だけパリ滞在を延長してペリオ本調査のより完全を期することにしたが、結果的には両方共中途半端に終るよりも、一方を完全にすることができてよかったと思っている。

こうしてロンドン、パリでの文献調査を予定通り終り、九月二二日正午過パリを出発、往路と同じモスクワ經由にて、翌二三日正午前無事羽田に帰着することができた。

四 結

以上述べたように、ソ聯のレニングラードこそ所期の目的を果すことができず、心残りではあったが、それを除けばまずまず予定通り、乃至は予期以上の成果をあげることができたと思っている。特に文献研究の場合、写真ではどうしても不明な部分が残るし、一コマずつに区切って撮影したものを、重ねて綴じてしまうために、実物本来の巻物の姿が失われてしまうのであるが、現地で実際に実物を手にすることによって、写真でみたのとはまったく別の印象が実感としてとらえられ、この一事についてだけでも、今回の約七ヶ月にわたる研究生生活は、私自身にとって極めて意義深いものであったと感謝している。

しかしながら彼の地でした仕事は、文献についての特徴をメモ的にノートするといわば研究材料の蒐集に終始したに過ぎず、それら材料の内容的な吟味をする時間的余裕はなかった。従って、それらの内容を検討し、学問的な成果をあげるのは、まったく今後の課題である。

去る一〇月二六日の第三回仏教学会研究会での「ヨーロッパでの文献調査より帰って」と題する発表も、以上述べてきた研究生活の報告が中心で、内容面については、僅かにペリオ文献中に見出された二、三の事項、すなわち『聖胃集』に関する新出資料（三九

一三）の発見、大正新脩大藏経第八五卷に収録されている唐の道氤撰『御注金剛般若波羅蜜經宣演』に欠ける巻上の尾部を補う二本（二一八二、二三三〇）と、従来上下二巻とされ、その存在のまったく知られなかった巻中を完全に補い、本来上中下三巻であったことを新たに立証した二本（二〇八四、二一一三）の出現等について若干触れたにすぎず、今後こうした調査結果を総合した成果の発表を用意しなければならない。しかもそれは、決して簡単にできることではなく、一步一步着実に積み上げていく以外に方法がないと思っている。この点諸先生方の一層の御指導御鞭撻をお願いし、七ヶ月にわたったイギリス・フランス留学記の結びとしたい。